

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第65輯

# 池田寺遺跡Ⅲ

近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

1991. 3

大 阪 府 教 育 委 員 会  
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

# 池田寺遺跡Ⅲ

近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

1991.3

大阪府教育委員会  
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

## 序 文

和泉市池田寺遺跡は堺市から広がる泉北丘陵の南縁にあります。池田寺遺跡の一帯は、古くから古代寺院のあるところとして知られており、大阪府教育委員会ならびに和泉市教育委員会によって、これまで数次の発掘調査が行われてきました。その結果、現存する明王院を中心として古代寺院の存在と7世紀から10世紀にかけての掘立柱建物からなる大規模な集落が広がることが明らかにされていました。この池田寺遺跡の東縁に開港開港とともに近畿自動車松原海南線の建設計画が立てられて以来、本府としても事業者側との協議を踏りながら、昭和62年度から発掘調査を財団法人大阪府埋蔵文化財協会に委託してまいりました。

この事業にかかる池田寺遺跡の調査は、すでに6次にわたっておりますが、この間、绳文時代の土壙群をはじめ、古墳時代末から平安時代にかけての堅穴住居や掘立柱建物などの集落の址が広範囲に確認されております。近畿自動車建設にかかる池田寺遺跡の現地発掘調査は本年度で終了になりますが、整理・報告作業はいま少し継続する予定です。本府ではこれまでの調査成果をもとに今後も周辺遺跡の文化財保護行政に努めてまいりたいと思います。

本調査を実施するにあたって、日本道路公団大阪建設局および、和泉市教育委員会、関係者各位と調査を担当された財団法人大阪府埋蔵文化財協会の皆様に深く感謝しております。今後とも本府の文化財行政に対して各位の変わらぬご理解とご援助をお願い申し上げます。

平成3年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 川瀬 誠

## 序 文

近畿自動車道路松原海南線建設に先立つ和泉市池田寺遺跡の発掘調査は、昭和62年度に始めて4年を経過いたしました。本年度で池田寺遺跡に関するすべての現地調査を終了したわけですが、この間、縄文時代から弥生時代の遺物の他、古墳時代末から平安時代の掘立柱建物群や井戸の検出など、これまでの池田寺遺跡の概観に新たな知見を加えてまいりました。

ここに池田寺遺跡Ⅲとして報告いたします調査は、本年度に実施した近畿自動車道松原海南線単独区間にあたります。生活道路として最後まで調査が残されていた地点のため調査面積もわずかでしたが、既に調査を完了しております北側地点と異なって、中世の掘立柱建物もみつかりました。これまでこの時期の遺構は土壤と溝がわずかに知られていただけでしたので、貴重な資料を追加できたものと思います。

これまでの調査成果につきましては、すでに2冊の報告書を刊行してまいりました。本書はその追加資料として参考にしていただければ幸いです。

本調査を実施するにあたって、職員の派遣など本協会の事業にご理解をいただいている近畿各府県・市・町教育委員会、ならびに大阪府教育委員会、日本道路公団大阪建設局、和泉市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くご支援とご協力を賜り、深く感謝をしております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成3年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈 祐吉

## 例　　言

1. 本書は、近畿自動車道松原海南線建設に伴う、大阪府和泉市池田下、室堂に所在する池田寺遺跡Ⅲの発掘調査報告書である。
2. 本調査は、日本道路公団大阪建設局の委託を受け、大阪府教育委員会及び財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施したものである。
3. 現地調査は、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が担当し、平成2(1990)年7月2日から12月25日まで実施した。
4. 調査は、調査課技師近江俊秀が担当した。
5. 本書の執筆、編集は近江が行い、出土遺物写真は小倉　勝が担当した。

## 本文目次

序文	
序文	
例言	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 調査成果	1
第1節 調査方法	1
第2節 基本層序	3
第3節 検出遺構と出土遺物	4
1. 第1面検出遺構	4
2. 第2面検出遺構	5
3. 出土遺物	9
第4節 下層確認調査	10
第3章 まとめ	11

## 挿図目次

図1 池田寺遺跡周辺遺跡分布図	2
図2 調査区位置図(1/5000)	3
図3 地区割図	4
図4 基本層序模式図	5
図5 004-OO平・断面図(1/40)	5
図6 050-OO遺物出土状況(1/10)	6
図7 043-OP遺物出土状況(1/20)	6
図8 第2面平面図(1/100)	7~8
図9 057-O F平・断面図(1/40)	9
図10 調査区東部ピット群部分平面図(1/40)	9

図11 023・024・026-O P 土層断面図 (1/40) .....	10
図12 出土遺物実測図 (1/4) .....	10
図13 下層確認トレンチ断面図 (1/80) .....	10

付図 1987・88・90年度調査地平面図 (1/200)

## 図 版 目 次

- 図版1 第1面全景（南から）・004-O O（南から）
- 図版2 008-O O（南から）・第2面全景（南から）
- 図版3 調査区東側ピット群（南から）・051-O O（北から）
- 図版4 050-O O（西から）・050-O O遺物出土状況
- 図版5 043-O P遺物出土状況・050-O O・043-O P出土遺物



## 第1章 調査に至る経緯

池田寺遺跡は、飛鳥時代の瓦が散布することで知られた池田寺を中心とする縄文時代から近世に至る複合集落遺跡である。当遺跡は、1978~80年に「明王院」北方にて大阪府教育委員会が実施した大規模な発掘調査により初めてその実態が明らかにされた。その後同遺跡内では幾度か小規模な調査が実施されてきたが、近年、関西国際空港建設着工と共に同関連事業である近畿自動車道和歌山線の建設が促進され、同路線が本遺跡内を通過する部分4,813m<sup>2</sup>について1987年12月から1988年8月にかけて財団法人大阪府埋蔵文化財協会によって調査が実施された。今回の調査はその時の調査地の未調査地である約200m<sup>2</sup>を対象として実施した。

現地における発掘調査は、1990年10月29日に着手し、同年12月14日に終了した。出土遺物の整理及び発掘調査報告書の作成は、1990年12月15日から行い、1991年3月31日に本報告書の刊行をもって終了した。

## 第2章 調査成果

### 第1節 調査方法

調査地は、明王院の東方約150mの地点で1987年~88年に実施された調査のII区とIII区の間を走る市道池田下4号線部分である(図2・3)。当該地付近は北東から南西へ緩やかに傾斜する尾根から平坦地に移行する部分に相当し、既往の調査の成果から埋積谷がある可能性も指摘されていた。

調査は既設市道及び擁壁を撤去した後、厚さ約1.0~2.0mの盛土を機械掘削し、以下を人力にて掘削を行った。当該地周辺は既往の調査の成果から遺構面が2面あることが確認されていたため、精査も土層業理の変化に伴って行い、また、埋積谷の確認のために、第2面終了後に調査区西側に0.5×8mのトレーナーを設定しTP+52.5mまでの土層の堆積状況及び遺物の有無の確認を行った。

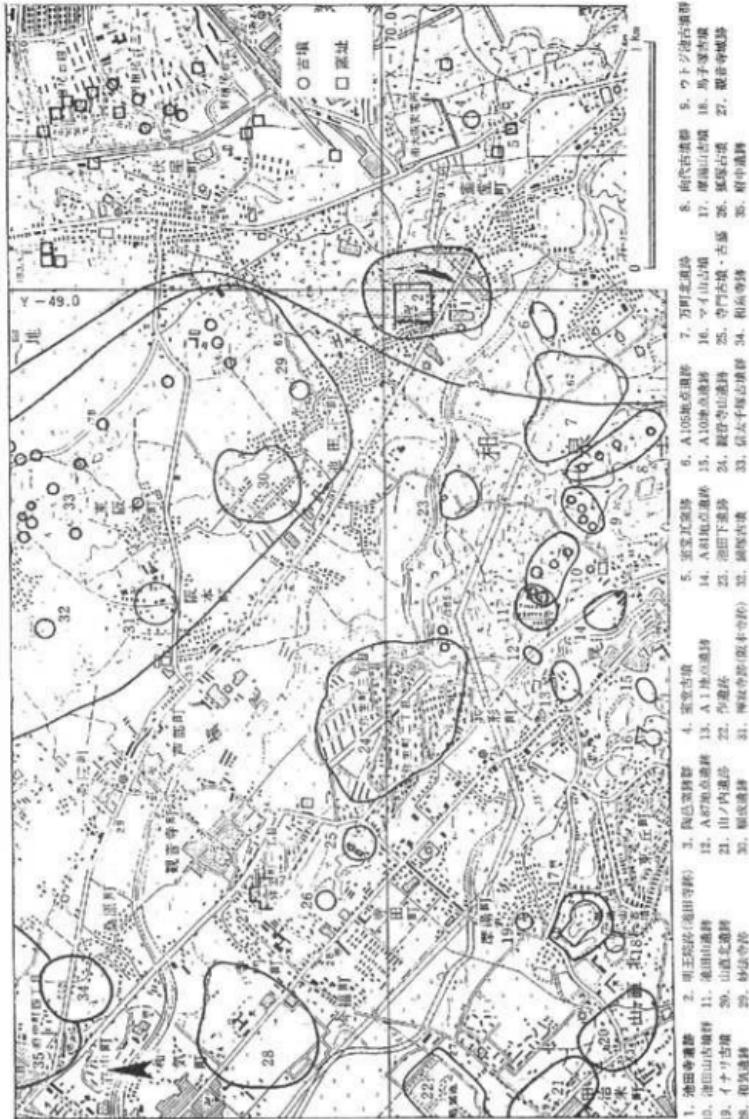


図1 池田寺遺跡周辺遺跡分布図

1. 池田寺遺跡
2. 明王院(鬼田寺跡)
3. 鬼田寺跡群
4. 弥生古墳
5. 銀杏古墳
6. A10地点遺跡
7. 万町北道路
8. 向穴古墳群
9. オトジ池古墳群
10. 池田山古墳群
11. 池田山古墳群
12. A10地点遺跡
13. A11地点遺跡
14. A10地點遺跡
15. A10地點遺跡
16. A10地點遺跡
17. 廣瀬山古墳
18. 玄子塚古墳
19. 4号古墳
20. 山道古墳
21. 山内遺跡
22. 佐倉古墳
23. 波田F遺跡
24. 親子山古墳
25. 大門古墳・古墓
26. 馬屋古墳
27. 鶴鳴寺跡
28. 和泉古墳
29. 朝法寺跡
30. 朝法寺跡
31. 朝法寺跡(鬼田寺跡)
32. 朝法寺跡
33. 信友子塚古墳
34. 朝法寺跡
35. 朝法寺跡

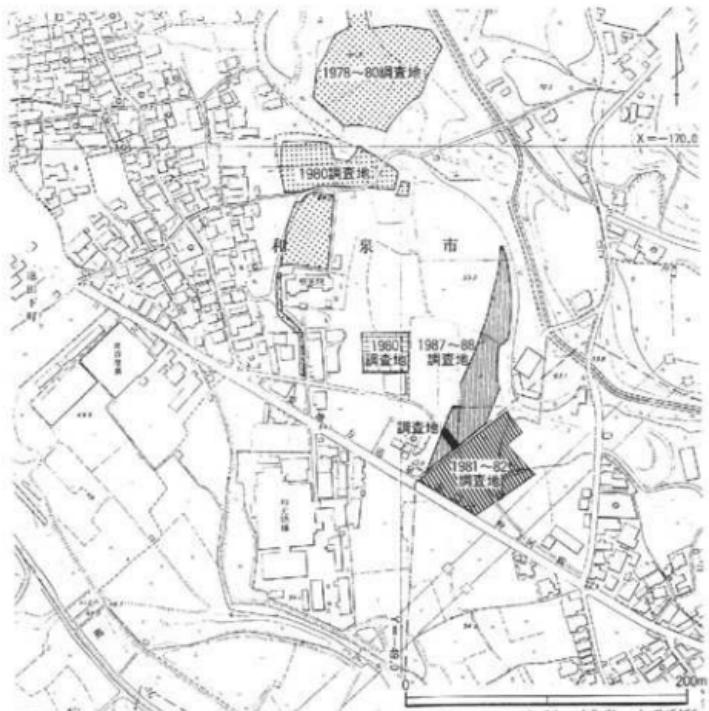


図2 調査区位置図 (1/5000)

## 第2節 基本層序

当調査地では盛土から地山までを含めて7層に渡る堆積を確認した。これらの土層の層位名は、隣接する1988~89年の調査区II・III区の土層とを対応させて用いた(図4)。

第1層：旧耕土及び床土であり、暗灰黄色砂礫混粘質シルト層と黄褐色粘質シルト層とに細分される。

第7層：奈良時代から中世の遺物包含層で、暗灰黄色砂礫混粘質シルト～緑灰色砂礫混粘質シルト層である。隣接地の調査成果ではこの層は近世の包含層とされているが今回の調査では、この包含層中からの近世の遺物の出土はごく微量であり、しかも近代の耕土に伴う溝等がこの層を掘り込んでおり、近世の遺物は溝埋土やその周辺から出土していることから、この層は中世に形成されたものと考えられる。

第8層：にぶい黄橙色砂礫混粘質シルト。中世の包含層で調査区北側では層厚約0.3mを測るが南側ではほとんど認められない。本層上面にて、溝、土壌などを数基検出した。（第1遺構面）

第9層：灰黄褐色砂礫混粘質シルト。中世の包含層で、8層同様、調査区北側でのみその堆積が確認された。

第14層：オリーブ褐色粘質シルト～緑灰色砂礫混粘質シルト。地山層である。調査区北側では、季大の跡を含む粘質シルト層で、南側では粘質シルト層である。

第16層：橙色粘質土。埋積谷の埋土であり、調査区の南西から北東へ向けて幅約8mの範囲で堆積を認めた。遺物は含まない。

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 第1面検出遺構（灰黄褐色シルト上面）

不整形の土壌8基と溝3条を検出した。以下、各遺構毎に概略を述べることとする。

##### (1) 001-O S・002-O S

001-O Sは、調査区西南にて検出した南北方向の溝で、幅約0.4m、深さ0.15mを測る。002-O Sは、調査区北東にて検出した東西の溝で、幅0.3m、長さ4mを測る。これらの溝は直交し、また、旧水田の区割りと同様であることから旧水田に伴う溝であると考えられる。

##### (2) 004-O O（図5）

調査区北部にて検出した長辺2.6m短辺2mの不整形の土壌で、土壌底部の凹凸が著しいことや、土層の堆積状況などから、風倒木痕である可能性が強い。

##### (3) 005-O O

調査区西方で検出した不整形の土



図3 地区割図

境で、検出時には二つの土壤として扱っていたが、第2面まで掘削した時点では、長径6mにも及ぶ細長い一つの土壤である事が明らかになった。これも004-Oと同様風倒木痕であると思われる。

#### (4) 006-O O

調査区西南隅で検出した不整形の土壤で、埋土や形状から、これも風倒木痕であると考えられる。

#### (5) 008-O O

調査区東隅で検出した土壤で、土壤東半部は調査区外に及ぶため全体の形状は不明である。埋土より、瓦器碗や須恵器の小片が若干出土した。

#### (6) 小結

第1面にて検出された土壤は、008-O Oを除くといずれも風倒木痕と考えられる。1987~88年にかけて実施された近接地での調査でも、第1面では、ほとんど遺構は検出されておらず、また、周辺と比べると当該地付近は最も地盤が低く粘質シルト層からなることから考えると、調査地付近は湿地帯であったものと考えられる。

#### 2. 第2面検出遺構（緑灰色砂礫混粘質シルト上面）(図8)

主に調査区北西部にて多数の

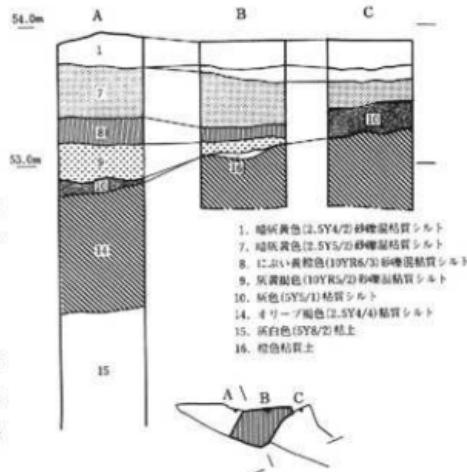


図4 基本層序模式図

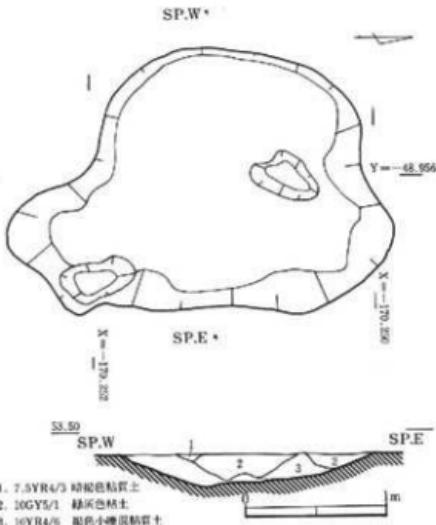


図5 004-O O平・断面図 (1/40)

ピット、土壌などを検出したが建物等は検出するに至らなかつた。これらの遺構には中世のものと飛鳥～奈良時代のものとがあり、両者はそれぞれ埋土が異なる。

#### (1) 中世の遺構

・050-O O 調査  
区東部で検出した長辺0.8m、短辺0.4m、深さ0.15mの不整形の土壌で、土壌中央部より、瓦器小皿、土器器器片、甕口縁部片などが出土した

(図6)。

・043-O P 調査区東部にて検出した一辺0.4m、深さ0.14mの方形のピットで、柱抜き取り穴内から口縁部の一部を欠く土師皿が一枚出土した(図7)。

・057-O F 1987～88年の調査で検出した342-O Bの延長である。前回の調査では5×2間の掘立柱建物であると考えられていたが、柵であることが明らかになった。各ピットは、65×55cm前後の隅丸長方形もしくは梢円形を呈しており、深さは20～40cmを測る。

また、今回の調査では認められなかつたが、前回の調査では、直径25～30cmの柱根が確認されている(図9)。

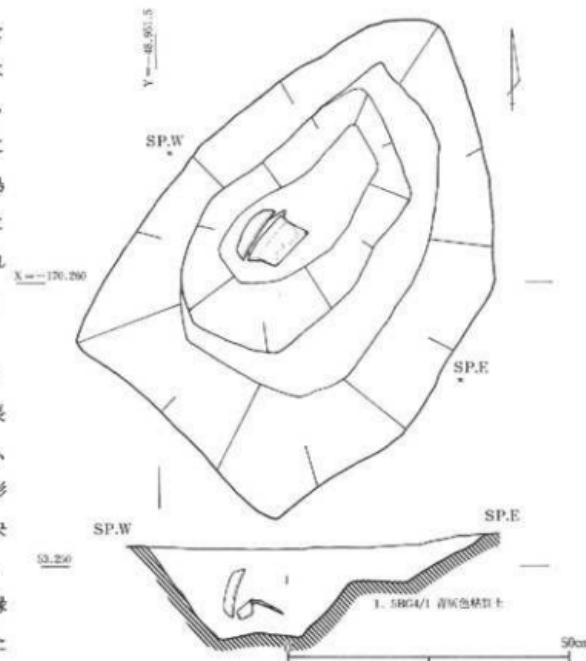


図6 050-O O 遺物出土状況 (1/10)

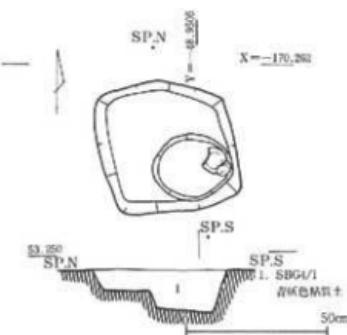


図7 043-O P 遺物出土状況 (1/20)

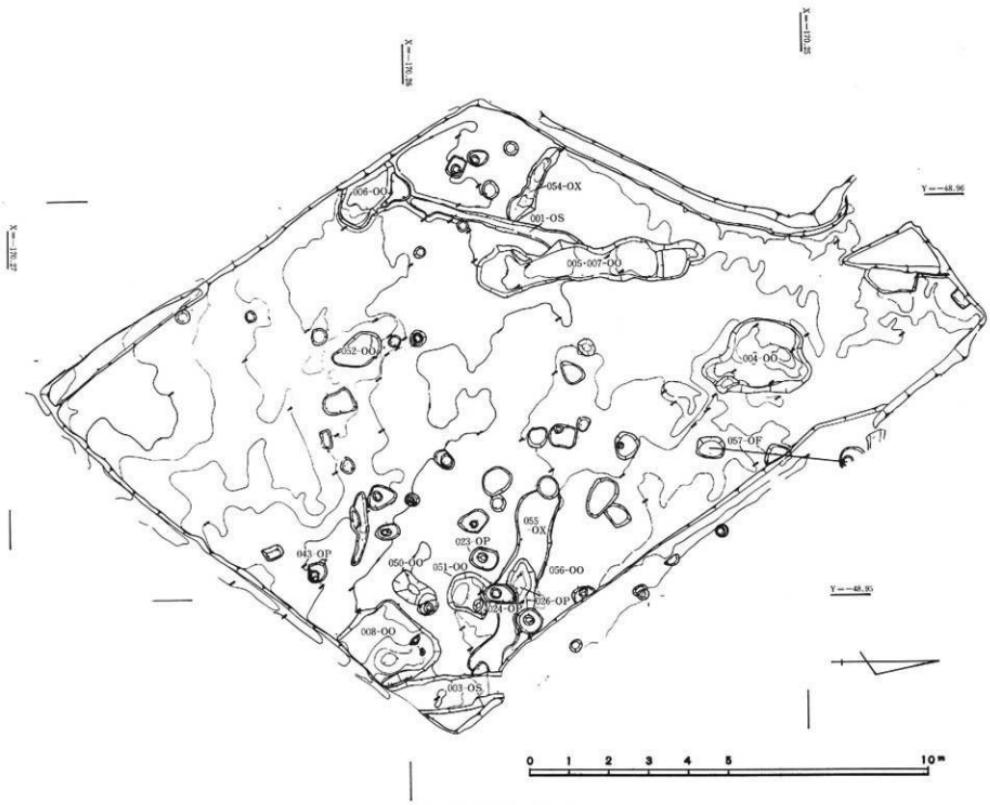


図8 第2面平面図 (1/100)

(2) 飛鳥～奈良時代の遺構

・調査区東部ピット群 一边0.4  
～0.7mの方形（長方形）ないし  
円形のピットが約30基検出された。

これらの埋土は、黄灰色粘土～暗  
赤褐色粘質土層で、土色の違いに  
より柱根が確認されるものもいく  
つかあり、それらはいずれも25cm  
前後であったことがうかがわれた。

これらのピット内からは遺物はほとん  
ど出土していないが、遺構の埋土が前  
回の調査で検出された奈良時代の遺構  
のものと同様であることから、おそら  
くこれらのピット群も奈良時代のもの  
と考えてよからう（図10・11）。

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物はすべて  
土器で、その数は平箱でわずか2箱で  
あり、さらにそのほとんどが包含層か  
らの出土である。包含層出土の土器は  
いずれも細片で、図化できるものは無く、器種構成などの詳細な検討を行なうには至らない  
が、傾向として須恵器の占める割合が土師器を圧倒している。これは、当遺跡が陶邑の南  
辺に相当することに起因し、和泉地方の遺跡としては、ごく一般的な傾向であると言えよう。  
また、池田寺に関係すると考えられる平瓦片も2点出土している。

遺構出土の遺物で図化し得るものは、050-OOと043-OP出土遺物で、これらはいざ  
れも中世のものである（図12）。043-OP出土土師皿（1）は、口径8.9cm、器高1.8cmで、  
丸みを帯びた底部とこころもち外反する口縁部を持つもので、表面は摩耗しているため、  
調整は不明である。050-OO出土の瓦器小皿（2）は、口径9.3cm、器高2.5cmで、平底  
に近い底部と内側する口縁部を有するもので、外面にケズリが施され、内面には、太めの

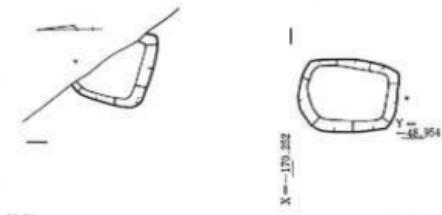


図9 057-O F 平・断面図 (1/40)

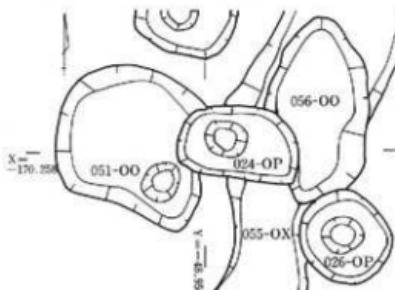
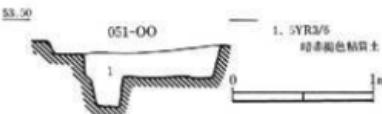


図10 調査区東部ピット群部分平面図 (1/40)



ミガキの痕跡が観察される。瓦器碗(坏)(3)は、口縁部の1/3程の破片で、復元口径16.0cmを測る。表面が摩耗しているため、調整等は不明であるが、外面口縁部をヨコナデ、体部に若干の指圧痕が観察される。胎土はきめ細かく、燃しこそ認められないがその形態から瓦器碗と考えるのが妥当である。最後にこれらの時期であるが、瓦器小皿の形態から12世紀中頃から後半のものと考えられる。

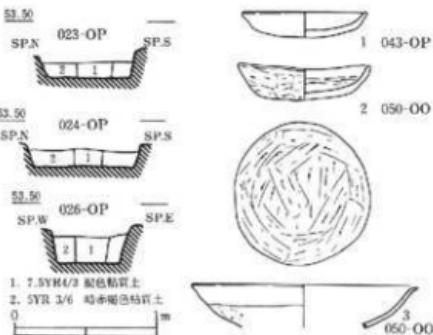


図11 023・024・  
026-O P 土層断  
面図 (1/40)

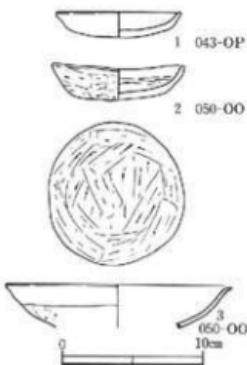


図12 出土遺物  
実測図 (1/4)

#### 第4節 下層確認調査

第2面終了後、調査区西側に0.5×8mのトレンチを南北に設定し、埋積谷の状況を含め下層確認を行った(図13)。谷の幅は約9mと広いが深さは0.5mと比較的浅く、埋土も橙色粘質土の単層であり遺物はいずれの層からも出土しなかった。また、周辺の地形などから、この谷は調査区南東から北西へ向かって流れる谷で当該地に集落が形成される以前に埋没したものと考えられる。



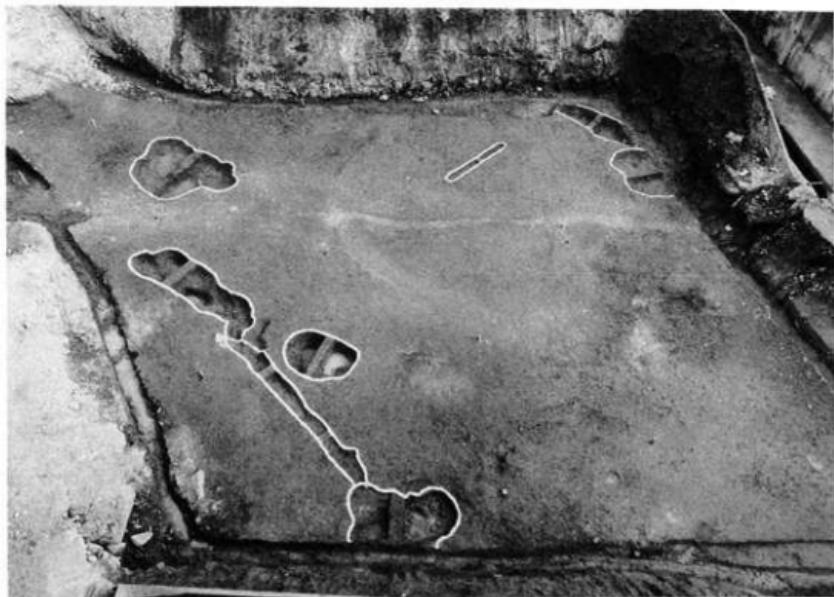
図13 下層確認トレンチ断面図 (1/80)

### 第3章　まとめ

今回の調査は、1987～88年に実施された調査の未調査部分であることから、遺構や遺物のあり方は、当初より予想されており結果もほぼその通りであった。当該地は池田寺を中心とし集落の東限付近にあたり遺構の密度も徐々に粗くなっていく部分に相当していることや、地形からもわかるように古くは湿地帯であったと思われる。今回の調査では埋積谷の位置と方向が明らかにされ、それと同時に谷と遺構の位置関係が明らかになった。このことは、池田寺遺跡の集落のあり方や変遷を考える上で注目される点である。



# 図 版



第1面全景（南から）



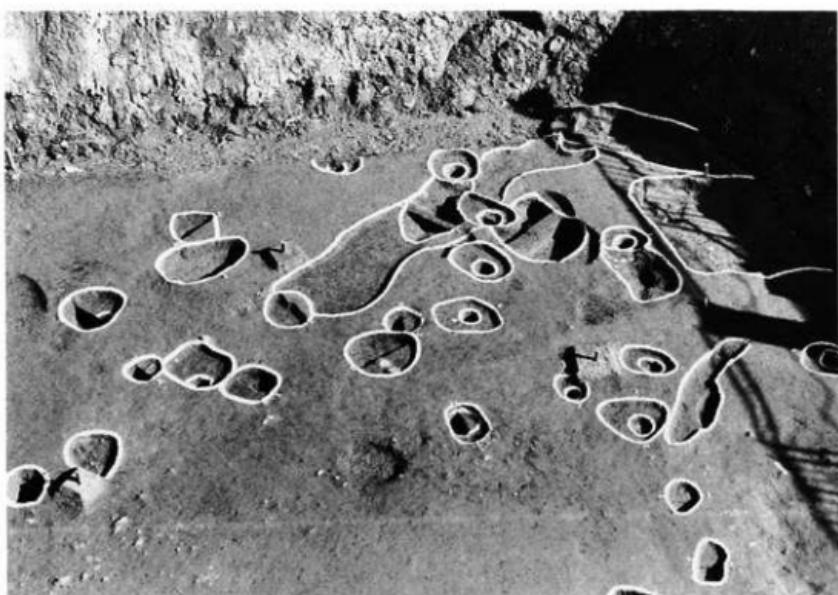
004-OO（南から）



008-OO (南から)



第2面全景 (南から)



調査区東側ピット群（南から）



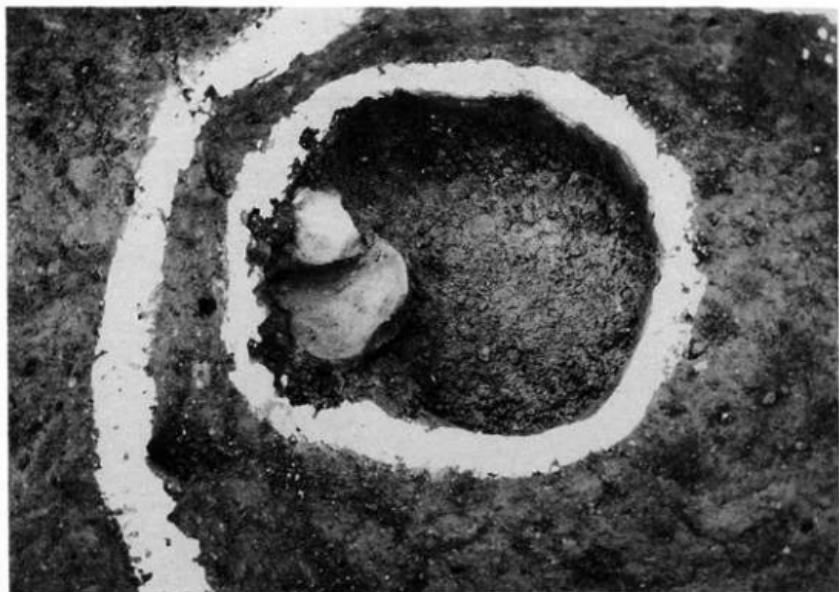
051-OO（北から）



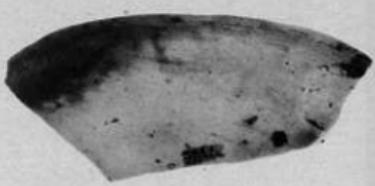
050-OO (西から)



050-OO 造物出土状況



043-OP 遺物出土状況



2



1



3

1・2 . 050-OO

3 . 043-OP

050-OO・043-OP 出土遺物

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第65輯

## 池田寺遺跡 III

近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

1991年3月31日発行

大阪府教育委員会

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

大阪市中央区谷町3丁目2番20号 大手前ウサミビル

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所



付図 1987・88・90年度調査地平面図 (1/200)

